



「普救類方」(塩田家文書 和漢 124~135)

いやす なおす たもつ



文書館資料にみる
病気・医療・健康

16

身を保つ④

普救類方～江戸時代の『家庭の医学』～

8代将軍徳川吉宗は、享保14年(1729)、薬の知識の不足により多くの命が地方で失われていることを憂い、庶民向けの医学書である『普救類方』を幕府の医師に命じ編纂させました。

つづいて享保18年(1733)、享保の飢饉後に疫病が流行したため、応急の薬の処方を記した『救民薬方』を印刷し全国の村々に配付しました。

写真は『普救類方』で、著者は林良適と丹羽正伯です。全12冊からなるこの本は、庶民も手に入れ易いように代銀9匁8分という格安の値段で販売されました。

「頭之部」「面之部」「目之部」「鼻之部」など身体の部位毎に病状を列挙しています。その症状に対して、内外の医学書の中から、庶民にも入手可能な薬や簡単な治療法を選んで平易な和文で紹介しています。また最終巻では薬草の種類を図入りで解説しています。

例えば、頭痛の対処法としては、

頭痛に、いたちささを粉にして水にてとき、こびんに付べし。又八、いたちささを袋に入枕にしてよし。 本草綱目

と、中国の本草書である『本草綱目』を引用し、マメ科の多年草である「イチヂササゲ」を用いた処方を説明しています。その他、数種類の書物から別の処方も示しています。

また、同じ頭痛でも「頭痛甚つよく頭裂くるがごとくなる」場合には、

当帰きざみて二匁、酒一合いれ、七分目に煎じつめ用ゆ 本草綱目

と、細かな症状の違いに応じ、対処法を書き分けています。

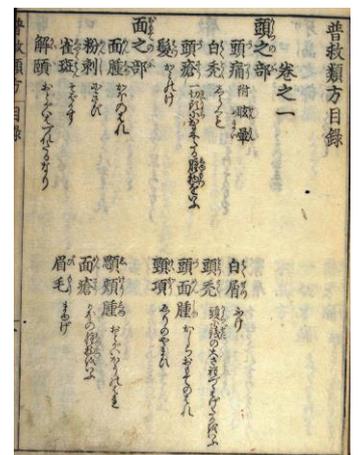
これらの多くは、漢籍や経験に基づく記述と思われそうですが、中には、「刀により指を切り落とした時には、蟹の脳髓や脚の髓を取り、熬って付けると良い」など不思議な記述もあります。これなどは、蟹の強力な再生能力にかこつけたものでしょう。

病気になった!! その時に

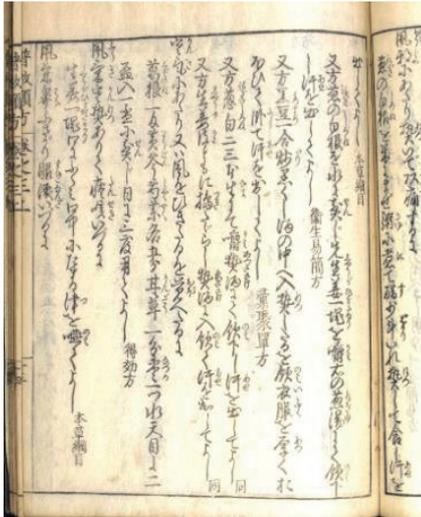
病気は突然やってきます。その痛みや辛さを改善するために、一刻も早く対処法を見つけ出し、処置しなければなりません。

そのような場面で使用されることになる普救類方は、できるだけ使いやすいことが肝心です。そのため、きめ細かな目次が備えられるなど、編集に工夫が凝らされています。

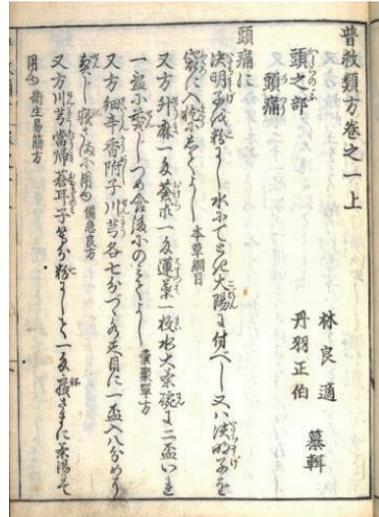
急病の時に、大いに役に立ったことでしょう。



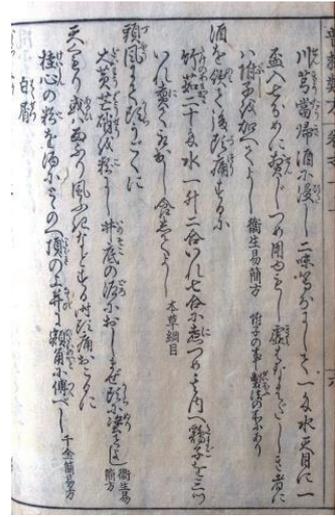
風邪をひき発熱、頭も痛い!!



頭が痛い!!

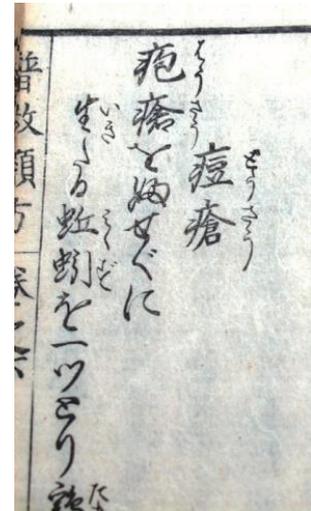


二日酔い対策...



普救類方

疱瘡を防ぐには



【いたちささげ】：頭痛の時に。

薬草図解



【茯苓（まつほや）】

防長両国で良質なものが採れました。



【みぞかい】

殻および身が薬として用いられました。